

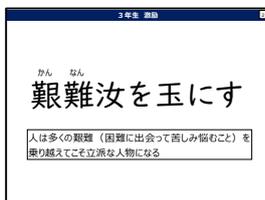
令和 7 年 1 月 8 日 (水)
第 3 学期始業式

それぞれの「ゲルニカ」に向けて

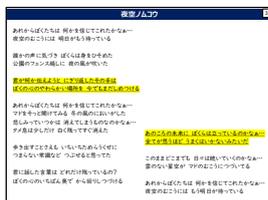
下村 昌弘



- 全校の皆さん、遅ればせながら、新年あけましておめでとうございます。戦後 80 年目の節目となる新しい年も、はや 1 週間が経ちました。正月の高揚感も去り、いよいよ覚悟を決めて前に進む時が来ました。ほとんどの 3 年生にとっては共通テスト、私大入試、国立大 2 次と怒涛の 3 か月が来ます。



- 「艱難汝を玉にす」。受験は自分を磨く最大のチャンスです。自分を見失わずいい勝負をしてください。
- 1・2 年生の皆さんも 3 年生の先輩たちの頼もしい姿を見ながら、応援の思いを送るとともに、この緊張感を享受し、1 年後、2 年後の自分に思いをはせてください。
- さて、3 学期の冒頭に当たり、私から少し話をしたいと思います。2 学期の終業式で話した“なりたい自分”より“ありたい自分”という話を深掘りしてみます。
- 皆さんには夢があるでしょう。おそらく多くの方がこのお正月に今年の目標を立てたのではないのでしょうか。今から話す夢とか目標というのは、今年に限らず、少し遠い未来の、つきたい仕事とか、やりたい勉強とか。あるいは目標の大学とか。そういう話です。みなさん、大なり小なり、持っていますよね。

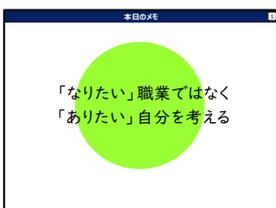


- ところで、かつて SMAP というグループがありました。彼らが 1998 年にリリースした「夜空ノムコウ」にはこんな歌詞があります。古い曲ですが聞いたことがある人もいるのではないかと思います。
- 「あのころの未来に僕らは立っているのかな。全てが思うほどうまくはいかないみたいだ」
- 若い世代の人たちが少し前を振り返りながらもまた前に進んでいこうとする姿がしみじみと静謐な形で歌い上げられています。
- 「君が何か伝えようと握り返したその手は僕の心のやわらかい場所をいまでもしめつける」

- もともと恋愛をモチーフとした歌ですが、それを差し引いてこの部分だけ取り出したとしても、「あの頃思い描いていた未来に果たして自分は立っているのかどうか」という問いは「自分の心の柔らかい場所をしめつける」気がします。
- 私も、皆さんの姿を見てると、最近よく昔のことを考える、思い出すようになりました。自分が高校生だったころ、大学生だったころ、駆け出しの教師だったころのことです。
- あの頃思い描いていた夢が今どれくらいかなっているのだろう。そう考えると少しセンチな気持ちになります。
- 身の上話になって恐縮ですが、こんな話をする機会もないので少し聞いてください。私は国語の教師ですが、高校時代、将来、英語の先生になろうと思っていました。それで初め英文科に入ったのですが、高校時代に恩師から言われた「これからは中国語」という言葉が忘れがたく、文学部の中国語学中国文学専攻に入り直しました。しかし、もっと教育の本質を学ばなきゃだめだと思って教育学をやろうと転部。結果的に国語の免許を取って教員になったのです。
- 高校卒業後、わずか数年のうちに夢の形がどんどん変わっていったんですね。
- 就職してからも思っていたようにはいきませんでした。仕事をしたのは高等学校だけではなく、佐賀県庁や霞が関にある文部科学省でも仕事をしました。それに多久市にある小中学校に勤務したこともあります。自分がこんな人生を送るなんて想像だにしていなかった。



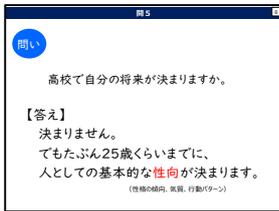
- しかし、これは私だけのことでなく、大なり小なりほとんどの大人はそうなのではないかと思います。そもそも高校生ぐらいの分際で世の中のこと、社会のことが分かるわけがありません。自分は何がやりたいくて何ができるのかなんて全く未知数です。
- まして今は VUCA の時代。変化の激しい時代です。自分の気持ち以前に、自分を取り巻く環境の方が大きく変わっていくのです。
- 夢を思い描くことはもちろん悪いことではありません。ないよりもあった方がいいに絶対決まっている。しかし、現実には思い描いたレールの上をスムーズに走れる人なんかそうそういるわけではないということです。



- ではどうすればいいのか。
- それは、その時その時に遭遇した悩みや問題、あるいは与えられたミッション、仕事としっかり向き合い、それに一生懸命に取り組んでいくことです。その中で自分の生き方を作り上げていくわけです。
- 私もそういう経験をとおして「なりたい」自分ではなく、「ありがたい」自分を大事にする、そちらの修養を

することこそが大切だと思うようになりました。

- 「なりたい」は、意識は外向き、何か特定の対象を外部に求めます。それに対し「ありたい」は自分に対して意識が向けられた状態です。いわば、どう考えるのか、どう生きるか。直接自分に向けられた「生き方」の問題です。



- ある中学校で話をしたとき、一人の中学生から次のような質問を受けました。「高校で自分の将来が決まりますか？」。普通科に行くか専門学科に行くか、切実な問題なのだろうなと思いました。
- 普通科にいる皆さんも大学入試や就職試験のことなどを考えると、高校で人生の方向性が決まるようなイメージになるかもしれませんが、私はその問いにこう答えました。
- 「高校で自分の将来は決まりません。でもたぶん 25 歳くらいまでに自分の性向（性格の傾向、気質）が決まります」と。



- この絵を見てください。うまい？ へた？ へたうま？ 誰の絵でしょう？ 美術の教科書に載ってませんか？ ピカソです。『泣く女』。一目見ただけでは無茶苦茶で、私のような素人にはどう評価しているのか分かりません。ピカソは泣いている女性をよく描いたらしいですね。

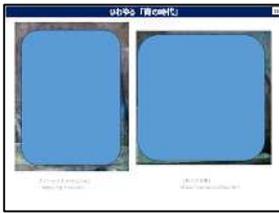


- これはどうですか？ これはピカソの集大成とも言える『ゲルニカ』です。1937 年ドイツ空軍による無差別爆撃を受けた年に描いた作品です。この中には泣く女の姿も描かれています。涙は流していません。この作品は発表当初、そんなに評価は高くなかったようですが、やがて反戦や抵抗のシンボルとなりました。この二つの作品は同じ年に制作されています。

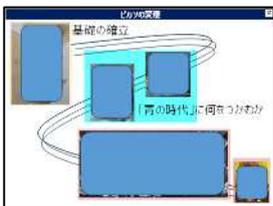


- この絵を見てください。この絵はどうですか？ うまい？ これなら私にも上手だなあとすぐに感じられます。実はこの絵もピカソです。
- これはピカソが 15 歳の時にコンクールに出したデッサンなんです。この繊細なタッチ、構図など驚異的

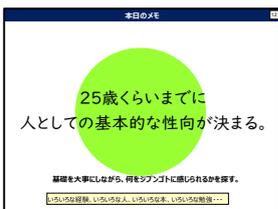
な素晴らしさで、その時の審査員が「年齢を偽称しているのでは」と疑ったほどだそうです。ピカソでさえと言うと語弊がありますが、ピカソだからこそ、基礎がしっかりしているのがよく分かります。



- ではこの絵はどうでしょう。『アイロンをかける少女』『盲人の食事』。これはピカソ 20 代前半の“青の時代”と呼ばれる作品です。ピカソはこの時期、透き通るような青色を基調とした一群の作品を残しています。
- 若いピカソは乞食や浮浪者、旅芸人など、言葉を選ばずに言うと、社会の底辺に生きている人を執拗なまでに描き続けています。若い感性がそうした人たちの生きる苦悩や悲しみを自分の心の深いところで受け止め、まるで自分のことのように感じ続けながら、人生や人間の真実の姿をとらえようとしたのだと思います。



- 先ほど見せた後年の大傑作『ゲルニカ』も若い時期のこのような経験なしには完成しえなかったのではないのでしょうか。他者の痛みを自分の痛みとして感じることができる“共感”の力こそがピカソの画を根底で支えているのだと思います。
- 翻って、皆さんが将来どんな「ゲルニカ」を描くことができるか。それは一人一人がこの「青の時代」に何をつかみ、何を養いうるかにかかっているということです。



- 先ほどの答えに話を戻します。
- 「たぶん 25 歳くらいまでに自分の性向（性格の傾向、気質）が決まる」と言いました。そこまでにそれこそ“おなか一杯”いろんなことにチャレンジする必要があるのです。



- そういう経験の中で、現実を直視する鋭い観察力であったり、現実の奥底に潜む問題点を見抜く深い洞察力であったり、そして現実を弁証法的にとらえ直そうとする高邁な批判的精神であったり、そういう力を養う修養（修行）を 25 歳くらいまでの間に意識して繰り返してほしいのです。



- さて、今日から3学期。当該学年の仕上げと次の年度への準備期間です。
- 勉強や学校行事、探究活動は先ほど示した観察力、洞察力、批判的精神を鍛える絶好の機会です。3年生の受験という経験もその一部です。
- いずれにしても、自分の目の前におかれた勉強、ミッションをジブンゴトとして捉えることです。年末に“仕事（勉強）と一枚になれ”と言いました。人任せにしない。人のせいにしない。うまくいったこともうまくいかなかったことも全部自分で引き受ける覚悟を持ってください。そして対象に没頭すること。
- 武雄高校は主体性を大切にする学校です。令和7年の皆さんの主体的で前向きな取組を期待しています。今年も一緒に頑張りましょう。以上で私の話を終わります。